



# 若者へのメッセージ 50

人間文化研究機構長 木部 暢子

## 【第一回】相手の立場に立って考えられるか

ひとは、自分の価値観で他人のことを見てしまいがちですが、それは、一方的な見方にすぎません。世界には、いろいろな人がいて、一人一人にその人の価値観があります。このことは、頭では理解できても、本当に理解するのは難しいことです。

### 「人間文化研究機構」という所

私は、人間文化研究機構という所に勤めています。何をやる所かという点、日本の歴史・民俗・社会・言語・文学などの資料や、世界の民族の歴史・生活などの資料、つまり「人間文化」に関する資料を大量に集め、それを使って「研究」をして、その成果を広く社会に公開する仕事をする所です。大学との違いは、大学が主に教育を行うのに対し、人間文化研究機構は「研究」を行う所です。そのために、全国の大

学の先生や研究者たちを組織してグループをつくり、いろいろなテーマの共同研究を企画して、それを実行しています。

実際にこれらの研究を行っているのは、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）、国文学研究資料館、国立国語研究所（以上、東京都立川市）、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所（以上、京都市）、国立民族学博物館（大阪府吹田市）の六つの機関です。国立歴史民俗博物館や国立民族学博物館では、資料の展示や個別のテーマに沿った企画展示を行っています



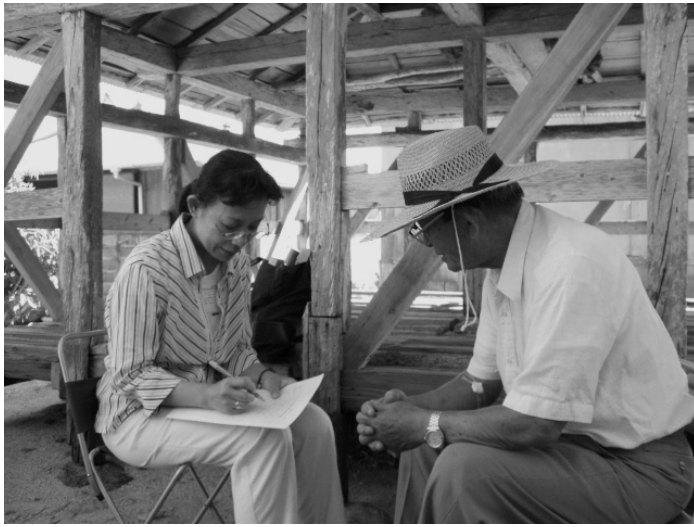
木部 暢子（きべ・のぶこ）

人間文化研究機構長。専門は日本語学（音韻論、アクセント論、日本方言学、危機言語研究）

1955年、福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。

純真女子短期大学専任講師、福岡大学院短期大学専任講師、鹿児島大学法文学部助教授・教授、国立国語研究所教授を経て2022年から現職。2006年から10年まで鹿児島大学法文学部長、10年から21年まで国立国語研究所副所長を歴任。日本語学会会長。

主な編著書・共著に『西南部九州二型アクセントの研究』、『地域文化の可能性』（以上、勉誠出版）、『そうだったんだ日本語 じゃって方言なおもしろか』、『方言の形成』、『シリーズ日本語史1 音韻史』（以上、岩波書店）、『日本語アクセント入門』、『方言学入門』、『明解方言学辞典』（以上、三省堂）などがある。



方言の実地調査を行う筆者（写真左、2007年）

ので、訪れたことのある方も多いのではないかと思います。これら六つの機関をまとめるのが私の仕事です。

今の仕事の前は、国立国語研究所に所属して、方言の調査や研究をしていました。日本は方言の豊かな国です。これらを調査して、方言を残そうという活動を行ってきたのですが、これについては次回に書くことにして、今回は、私が小さかった頃の話を書きたいと思います。

### 雲をながめて空想の世界にひたる

小学生の頃、私は雲をながめるのが大好きで

した。シュークリームみたいとか、エビみたいとか、熊みたいとか、雲をいろいろなものに見立てて、空想の世界にひたるのです。ずっとながめていると、さっきはエビだった雲が龍りゅうになったり、一頭だった熊が二頭の小熊になったり、雲は変幻自在です。「雲の中はどうなっているのだろう」という疑問が自然と湧いてきます。石井桃子さんの小説『ノンちゃん雲に乗る』に出会ったとき、私の名前が「のぶこ」ということもあって、まさに自分にぴったりのお話だと思いました。そのときから、この本は私の一生の師になりました。

### 『ノンちゃん雲に乗る』にのめり込む

『ノンちゃん雲に乗る』は、文字通り、ノンちゃんが雲に乗るお話です。雲といっても、池に映った雲です。ノンちゃんは、ある日、神社の境内の木に登って、木の枝ごとその下に広がる池に落ちてしまいます。ここからは、夢の中のお話。ノンちゃんが落ちたところは、池に映った空でした。空でもごもご泳いでいると、雲に乗ったおじいさんが、ノンちゃんを雲の上に引き上げてくれます。そして、おじいさんに尋ねられて、ノンちゃんの身の上ばなしが始まります。

身の上ばなしといっても、九歳のノンちゃんの話は、おとうさん、おかあさん、にいちゃん、

犬のエスの話くらいです。そのなかで一番長いのは、にいちゃんの話です。ノンちゃんのおやつを横取りしたり、どろ足でおかあさんの大事な布を汚したり、勉強ができなかったりするにいちゃんのこと、ノンちゃんには許せず、それをおじいさんに訴えようとしたのです。

しかし、おじいさんに「おまえのように、勉強ができて、なんでもできる妹をもって、にいちゃんもつらかったろう」と言われて、ノンちゃんはおじいさんの言うことがよくわからないなりに、胸のなかが温かくなってきます。そして、「家に帰ったら、にいちゃんと仲よくしよう」と思うのです。

これを読んで、やはり、「ノンちゃんは私だ」と思いました。私には、男の兄弟はいませんが、小学校のクラスには、決められたことを守らない子、掃除をしない子、行儀の悪い子がいて、私は、そのような子のことを許せないと思って、ひとり腹を立てていたのです。しかし、この本を読んだあと、「私もノンちゃんのようになろう」と思いました。大人になっても、この本をときどき読み返しますが、そのたびに「私もノンちゃんのようになろう」と思うことを繰り返しているのです。あまり成長していないのかも知れません。